

‘ό κόσμος, ἀλλοίωσις· ό βίος, ὑπόληψις.’

8号 1990.2.26

文・編集・発行
恋・怪子



LIVE: ティラ/ザウルス 1990.2.14 渋谷ラ・ママ

ときどき雪まじりになろつめたい雨の中でござえていたせいかはじまるまで、ぎゅうづめの中で立ちっぱなしでいたせいか。気持ちがガサガサして、ギターの音があいまいにしかとどいてこない。そこにかかっているやをはらいのけたくてしかたがなかった。この日のライブは芸居を見ているようだった。ヴォーカルの人の役者ぶりがみじとだった。

おわりの2曲くらいで、やっとティラ/ザウルスの世界を感じられてきて、もやは消えた。アンコールで、ヴォーカルの人が、古いバンド仲間が事故で死んだ話をした。別のときだったら、別の人だつたら、死んだ人の話をきかされ、「といつの冥福を祈って下さい」なんていわれたら、とういう愁嘆場のおしゃけに反発しただろと思つ。けれども、あのとき、そういう私的な現実生活のほかの出来事をきて、私自身があのときかえていなければならなかつた現実生活の出来事が大きくうかびあがつてきた。そして、そのことを思考するんじやなくて、そのことを、そのままうけとめようと思つた。「いいんだ、これで、『私だけじゃないんだ』と。

死は、ありふれたことで、とくべつなことではないけど、死を感じる、死をうけとめるヴォーカルの人のいは、他のだれのものともちがう、この宇宙でたつたひとつ、とくべつのものだ。そのことが、すぐにわかつた。そのいはに、私の心が英に鳴つた。死とか、失意とか、悲嘆とか、現実に足をとられたふうなことで、ひきおこされたものありさまの中に幻想を見た。ティラ/ザウルスのライブ 3/18ラ・ママ 3/29虎の門 (ワンマン) (イベント)

LIVE: ボイラーズ 1990.2.20 新宿アンティック

足もとからわきあがってきたものがズーンと頭までのぼつていて、それがずつとびづいていた。「ブース」なんてかんたんにいつてしまつたくない、そんな感じだった。ボイラーズによってひきおこされたものを探っていくと、どんどんどんどん自分の内奥に入つていく。形のない、ただその存在だけが感觸できるようなもののところへ。それはティラ/ザウルスによつて一気に見られられたものと、どこかでつながつてゐるみたい。ここまでいくと虚構も眞美もおんじだ。いまの私はティラ/ザウルスとボイラーズで生きている。ボイラーズのライブ 3/30高円寺 20000V 每日曜日原宿歩行者天国

ボイラーズをきて、ブースというものをブースといつてわかつた。ビル・ホリデーもブースだった。シャニス・ジョプリンもブースだった。THE BLUES BROTHERS BANDの「STAND BY ME」をくり返しくり返しきつた。STAND BY ME、そばにいてほしい。人間はひとりで生きて、ひとりで死ぬ。だれもそれをさけることはできない。孤独を消すことではない。でも、それは私だけじゃない。だれでもどうだ。それぞれの孤独を深く感じれば感じるほど、他人の孤独も深く感じとれる。あなたが私のそばにいてくれても私の孤独はなくなりはしない。私があなたのそばにいてあげてもあなたの孤独はなくなりはしない。けれども、そういうあなたと私だから、せめて、そばにいてほしい。STAND BY ME。これがブースなんだと思う。

CD: THE WINTER OF '88

ジョニー・ウインターが来日するのを知つて、ためらわずに発売日にチケットを買った。そして家にあったレコード「JOHNNY WINTER CAPTURED LIVE!」をきいた。15年近く前のライヴなんだけど、私はすこく新しく感じられた。うーん、なかなかいいな。だけど、いまはどんなのがかな?と思つて最近のCD「THE WINTER OF '88」をきてみた。1曲目「CLOSE TO ME」は、ドラムと手拍子(?)ではじまって、「イーッ!」というジョニー・ウインターの声が入つて、ベースが入る。ギターの音が入る前のエレクトロニクスの10ヤケで「ガーン」となつた。そこにはギターがズーン、ズーンと入つて、ジョニー・ウインターの歌がシブーク入つてくるんだから、もう、うとうとしてしまつた。こんなのはMZAできけるのかと思ったら…。やつた! /曲目「CLOSE TO ME」から12曲目「IT'LL BE ME」まで、ロックンローラギングギングのブース!「THE WINTER OF '88」は必聴!!! MZAのライヴは必見!!!

ジョニー・ウインターのライヴ 3/5, 6, 9, 10 有明 MZA

LIVE: DOOM 1990.2.3 東十条GIG HALL

はじめてすぐに変な気分になつた。落ち着かない。ドラムの音が全然ちがう。どこかどうちがうって言葉にはできないんだけど、なにしろ、これじゃない!って感じ。不安が渦巻く。ぐるぐるまわる光がまぶしく気が散るかももれないと思って、あちこち場所をかえても不安は消えない。どうしたんだろ? そうしたら2曲くらいやつたあとで、ギターの人が、ドラムがメンバー・チェンジしたつていつた。(げ!) やっぱりそうなのかな。気持ちちはがくがく。去年の11月22日芝浦インクスティックで、あんなにドラムにひきつけられたのに、次のライブでは、もううけなくなつた。できるだけライヴをきていてよかった! 新しいDOOMもきっとすぐに好きにならうと思つけど、いまはだめだ。五一。

(追記)

2月18日DOOMの前のドラムの人が入つたWAR PIGSといつぱしてきに日暮の魔島館へ行った。ドラムとベースは、まあまあかせるが、ヴォーカルは、うがいのときみついたいな声で、なに歌つてんだか全然わからぬ。ギターはみごとなくらい特徴がない。ドラムがいいヒットでDOOMのヒミツの緊迫感はない。あれをきてあそらぬがほつた。

CONDOLENCES:

宝島 3月号のライヴハウスのスケジュールを見ていたら、大阪のバー・ボンハウスが「1月7日で閉店しました」旨のことが書いてあった。
2月号には1月と2月のライヴ・スケジュールが書いてあったから、COLORのライヴで死者が出てたからだと思つ。「宝島」は3月号の後記で、BAKUのメンバーの1人の交通事故死と、JAGATARAのヴォーカルの人の死に対して哀悼の意を表明している。それなら、COLORのライヴで死んだ子どもにも哀悼の意を表明することが大事だろ。バンド・ブームかドートカ、コトカ書きまくり、ミュージシャンの写真をのせまくり、あまりまくり、それで子どもたちがライヴハウスにおしゃせて、こうしたことがあつたんだから。

38 ザ・バー・ボンハウス(大阪)
☎ 06(372)1018

◆19:30~21:00
1%サブレーン、SMILE KINGS

11木モルテン、ROOSE

12エリック・リックギング、5ギャングロ

ケット、KNOCK EM DEAD

15マトラルネックウェイク

17BILLY & THE SLUTS、ストリッパー

キング

18木ディーラー、RATE GREEK

20木虹花林、おりはんとん

21木SELFISH OPENING '90

→ S-O-B OFF MASK O.DARK MINE

FIELDS, THEATRE BROOK, GAUZE

■18:30~20:00 2060 22369

23木データーブー、RAW HEAD REX

24木SWEET VEIN, GULLY VOICE

26木TILT、サンキーローズ→1500→1800

28木AION

29木ボイラーズ、アイランダーバンド

30木マルコシス・スパン、バレンタイン

3木KING SIZE

2木エディティッシュション

3セリカ

38 ザ・バー・ボンハウス(大阪)
☎ 06(372)1018

ナガ・バー・ボンハウスは、平成2年1月7日をもて閉店いたしました。長時間に渡るご愛顧を感謝いたします

WORDS: マルグリット・エ尔斯ナー「アレクシス」より

いっさいの沈黙は、口に出していわねなかつた言葉から成つてゐる。私が音楽家になつたのは、もしかするとそのせいなのかもしれない。誰かがその沈黙を表現しなければならなかつた。その沈黙に含まれる悲しみを表出させ、言ひば「それに歌わせなければならなかつた」言葉を用いてはならず——言葉はつねにあまりにも明確すぎて結局残響になる——、使えるのは音楽だけだつた。なぜなら音楽が慎しみを欠くことは決してなく、嘆く時にも理由を述べたてたりはしないからだ。